

氏名	金 柱鎬 (キム ジュホ)		
学位の種類	博士 (芸術)		
学位記番号	甲第 10 号		
学位授与日	平成 18 年 3 月 23 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
論文題目	崇高なる感動 —キリスト教的木彫が目指す人為的崇高について—		
審査委員	主査 教授	諸 川 春 樹	
	副査 教授	島 尾 新	
	副査 教授	竹 田 光 幸	
	副査 東京国立近代美術館企画課長	松 本 透	

内 容 の 要 旨

<概要>

1. 崇高なる感動の初体験
2. 美の範疇 (崇高なる美の移入)
3. 崇高
 - ① 自然から感じられる崇高 (エマニュエル・カント)
 - ② 人為的崇高: 深い信仰 (プロテスタント)
 - A. 支配者が自らを神格化する手段としての崇高
 - B. 感動による善なる崇高
4. 構成主義: 自身の作風を美学的な面からみて分析すると、構成主義の範疇の中での隠喩的な表現
5. 木彫の立体の構成要素
 - ① 空間→予想空間
 - ② 量感→予想量感
 - ③ 質感→木が本来もっている崇高さを生かした質感
 - ④ 着色→十四年間の木彫経験を基に多摩美術大学の博士課程で成立させた、有機体

という短所を考慮した新しい着色方法

6. 木彫：組み木方法と寄木方法

木という素材が本来もっている短所を利用して組み立てたり、合わせたりすることで、短所を長所に変えることが、創作研究の課題のひとつである。

7. 新しい学説：模倣心理の中には無意識的な反省が潜んでいる。

<研究目的>

- I 既存の学問（学説）を研究して、その成果を創作の過程に生かしながら新しい考えを見つけ出すこと。
- II 創作行為の目的は、崇高なる感動の社会的還元にあることの提示。

私は「美術において創作行為により追求しようとするものの本質は崇高なる感動であり、作品とはそれを凝縮し、生み出す善なる美」であると考えている。しかし、ここでもう一つ問題にせねばならないことがある。すなわち「何のために創作行為を行うか」である。芸術とは、「創作者あるいは創作物と、鑑賞者とが相互に作用し合うことで、精神的・感覚的な感動を得ようとする活動」と定義される。私はこのことを念頭において創作行為の目的が、崇高なる感動の社会的還元であることを示そうと思った。

また人には模倣心理がある。模倣本能を辞書で確認すると「芸術文化の発生、また発達要因での模倣をする人間の本能（これらが流行、伝道、習慣等を形成する）」となっているが、人間が模倣を欲する前段階の心理状況を考えるとまず自分より優れているもの、そして自分より偉大なもの、最後に自分が真似できそうなものに対する志向が根本にあるようだ。

今回の論文作成を通し、人間に内在する様々な心理の中に「無意識的な反省を求めるもの」の存在を発見した。これは模倣心理の先にあるもう一歩進んだ人間の精神活動である。例を挙げると、「使い捨て文化」が精神面にも浸透して人間の心や存在までもが軽視されがちな現在でも、人間の尊厳や崇高さを刺激するものに私たちが強く心惹かれるということである。それは自分をより優れたもの、偉大なものと同一化したいという人間の模倣心理からくる作用であり、それにより人間は今の自身のあり方に疑問を持ち、自分自身に問いかけることができる。そうした精神活動が、こういった時代にこそ必要なのではないだろうか。

結論として私の創作行為の本質は崇高なる感動を与えることであり、創作品とはそれを凝縮し、生み出す善なる美に他ならない。そして創作行為の目的は、鑑賞者がすばらしい作品に触れて崇高な感動を受け、そして自身を振り返るという無意識的な反省を通じて正

しい人格形成に役立ち、それにより幸せな「地球村作り」に貢献することにある。私はここに自身の芸術家としての有意性を感じるのである。

また違う場面から作品を述べると、私の作品は三次元的な表現を手段としているが、目標は三次元を通し、空間を形成することにある。換言すれば、大きな立体と小さな立体の間に発生する空間からでるエネルギー、つまり私の研究課題である人為的崇高さを創り出す事である。その崇高さは五感以外の感覚で感じるものであり、人間の三大欲求以外の欲求を充足させるものである。

序論で述べたように、私にとって創作とは望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認する証拠として立体を提示することである。

それは、見る側が感動を蓄積し、そこから永続的な感情を誘発させることによって、作家と鑑賞者の間に共感を生み出すことも目的の一つである。つまり、私が崇高なる感動を人にもたらすことによって、より大勢の共感を形成したい。なぜならばそれは、私が望んでいる崇高な美をもとにした永遠なる善の感情に他ならないからである。